里見八犬士傳批評

1 部 4
600
87

特
別貴重
函 60
巻 87

八犬傳第八輯上帙批評

此編上下二帙の批評は曩に諸家の物論あれば中子が流出せざる所もかけるとかく其迹を拾ひ又は新らやあくんと臆見を添へ漫に記す

識者諸賢の笑話に供せる而已

○七十四回小文吾曩牛と出家件とを件りて識の弟雪雲に成る件と七輯の戴手形をかりてさて〻〻ふ清もえ人の弟が曩牛に逆匿しが面と彩も清もありて人と搖きのみ進出ふ文吾のくうこが親品彩が名さへ名常あくる浜ふ答膳の欽合と正

客より酒肴を出し丸吸ひて謝礼の品をこがまに与へ〳〵礼
辞して二里餘の路を走りて〻〻岩を巡りて酒の肴も解く侍ひ
御夜事の去後も礼さび婦人を助けて雪霜を冒す
世伝の物語を去とう唱へる卑伝の情態のべ来りて妙なり一体
武伴須本去年が小文去年牛を正めて拉致より新子の老若男女の
性我ぜずと誘ずより答無の体謝恩と賜の孝子講談して異
義ぶ〻ざとぶ村長の体を伝へる牛力士なるが年後の恵者多者の
人命を施く能ち接ぶれば「強の年雪霜とも枯とも偽て裏
と偽り一蓮を解きてる武富松ど侍る死殺を人ぶを年とり

又家拝をとり是の品の小道を一つとして拔月多き去ひ方例のり
ぶ〻歩の用心感ふ〻「船出ぶ強ぶ小紙ぶれて多くも丹を
ぶ嶽して急迫の偽事も猶行のきくれる金体北七十四回八伝奇院年
ぶ〻ば小蓮ぶて猶偽年ぶ〻今此一回の内ぶ〻英士八英士村長
村長牛力士婢女ト男賊婦悪漢者の体なぶと書ぶれる
他人の化の五段一所是一回ぶ〻て〻の法ぶ〻り〇七十五回船出ぶ
舟後ぶ〻ぶ〻ぶ〻「奸紅ぶ〻ぶ〻ぶ婦人て長尾の鉄化と
ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻「緑達と敷てる木之葉ぶれを除て後ぶ〻る
ぶ〻ぶ方舟後ぶ〻ぶ〻ぶ〻の後ぶ〻ぶ松剛霊ぶて

長江を川なめく能事なられども小文吾が孤剣の夜叉を
こまやかに快遊あんと云あるべし又前後の路中例し者と伴なる
ものと逸遊するあるべしらる雪を踏りる足跡の深さ五六寸
定と分る用心眼力最くふ新過ぎる英雄の仕業とも云ぶ
きて見あふ初せる感ありり須磨と兵庫
枢ふ如し村長と言ふる人夏浦の元浮屠又夜叉とよくも鍛
冶利ある夏くの人と小あ尺須磨之浦の人まで此回の新りを
子〳〵分〳〵まる最〳〵〇七十六回船ぶ小文吾に捉ぶまて
宮夏虚徒すまじへて成を逃れんと歌〳〵妖奸者賊の情
正ふ人ふが如〳〵次周吉が小文吾に敵意を改めと張ぶる所そ
彼の大刀自の臨改と言出さるる此所ハたぶれ神慮まもしのうと
主ねて次周吉も云ふる親方ぶれども浮ふ小文吾荘女ふら生捕れ
みハ次吉をの云生の罪ふ云へる由元の陳言のけんぶる事の張本
にて陸奥ぶそ内ふげふ如ふるもあり〳〵と者言ふ云ハ云ふれ
四郎〳〵て最〳〵〇小文吾が神慮僅のうと論破せるハ右正き
名言ふれども次周吉が意対孔世の時ハ邪正混乱〳〵理非紛雑て
新ふ如〳〵と云ふ一部ありてゆふ時勢とうふも撰〳〵あるべし
〇荘女庚申吉ふ毒殺宿〳〵る孤剣夜叉悲寂莫ふる旅情さも

てをと感ぜらるゝ武州の庚申塔にはこれ同船の上の歌けを以て荘
介の家僕の名をも拾ひ出し新治の庚申塔にはこれ船歌を以て
小文五郎義信と家の名あらはし義仁の親と称ふ便宜を以て
彼と是とを思ひ合せり又小文五郎を思ひ合せて是を消息と
因縁又は由緒のあらはれて却て彼るべきものもなき
歌とは言ふ迄もなく草鞋あり賢愚を問はず各自の所有物
面白いとも云へて然もて奇なり如是〇七十七回荘介新治
旅宿にやどりて主人の伴僧より庚申塔の歌と相ふ伝を
分るげもの之事を懐へ人ふ〻有べきに酒顛二ゞ之事の時船

岩川出あてこれいふ好好の歌伝て孫娘を伴ふる若代船長ゲ
新吉を夜ぬふ所持ゲ大主と銭ゲ与へ出べきふ之と
利益を得ふ残しふ歌の所也内ふ家ふ〻めて使ふと申也
ある時もとりて之の家を拾ふ〻恵報の初と所と小文五郎義
家者て主人の陽事眼病平癒ゲ為ふ荘介の所を乞ふ〻新治の
荘介是歌ゲ〇七十八回題目の北毋東使の書ふ若面
白し北方八教代の家と孫ゲ使ふ伝ゲ老法の大刀自ふ
家ふ新の事ゲ拾ひ出ゲ東方八農ゲ家ふ東使ゲ
二大主と移りやる使ゲ拾ひ出ゲ東使の名ゲ監定より遠ふ

二大士六歳年の生ぜらるる所の新流の寄流なり由元が二大士を
もて筑紫島の理政ゆるるうち國と定める棟梁の老臣おのも
おのおのもて二大士の由元が徒となりて者りとうて却つて
主義の家〜大日月の宮殿なりと考へる主義の
主性相〜ゆゑて慶家〜一時五所幡六所なるが刀劍と御振
うて首級を獲定〜る世の白者ふきて〜ふとう祭りの考み
新るる多のり性もべ〜歳ひべ〜〇七十九回由元が宮殿に二
大士を匿せる水濱の辛江が屋敷の拝ふ行はれど宋江が
ろう宗ひとさみんの拝ふ設置ると申元が移ふ要ふ設置

ことをのの拝ふ設置をりて生ぜるとも申一所若如所
由元二大士と刀劍の問答ようの如所若無ようて莊女ふ一所
得ありるの時ふ新宮の子と拝ふ義ふけひる新宮ひて生〜
次ぎもるが二大士を擁んとて徘徊〜去もから及ぎまて首ふても
奪ひんと奥倫ひて〜に踏るるもて迫ふ拝るるもて近ふ拝ひて次ぎもが
合ようて首ひと注報ひる大敵ようり又後ひて仮報ひん仕使
の者の中為所ようり次ぎもが近退仕るる所なり新ることを
如ぎの拝命ようひるも〜迫〜拝ふ拝ふ者て拝ふ拝ふ
ろ〜拝ひるも拝ひ〜ゆ〜〜吹ふ拝世井ふ拝〜を両東侯ふ

付て是なる是を新手の仕方にてどうかすると出て来る所の毛髪が
殘仇と新手に成よりの両事使に切を合点するより三寸ばかり
一り殺さまくりきて闘手の場ハ三寸があるハざりしも為選ハ
なるべく又三寸ゟ長きをぶる為ハ女小文字刀をもちうるあり所ハ
ぶるあり此形ハ是よりぬく〇八十回計回是より〇ぶと着実
捨より由元ゟ諫言諫論刀鞘の事ハ大刀の中形場
却て大時代の見きるべくつくめ〇一段新して計流行の段の事
利場と合ゟ同人の発るのこと有て蓮左寺蹇兄の渋紙ゟ
より毛髪の御用ゟ〇〇愉快ゟ訴ゟ初ハ計蹇兄を

仇の名あり名是あるべしと思ひ毛髪ハ乃んで完歩を殺者を
名乗りとるあて御家豊宣侍者ゟびつり殺毛ゟる世ハ
家の血字ハきて沢宣ゟ斬ゟ者ゟ此鞘者と
言ゟ為て看宣ゟ為て和と思ハ毛ハ者ゟ渋紙ゟ
好者の姉文句題を解べし〇〇銃刀にて見ゟ事蹇兄を斬ゟ
両事使侍者のこゟ〇〇者看宣ゟ定めて本の名ゟ為ぶんと思ハ
せ所と新ゟ恵状業此面の新面人言の表ハ出て渋紙ゟ姉事
大寄人為故傳の落命ハ之法ゟ為ゟ為て者級のこゟ
ゟ〇〇為ゟ温泉とつぎめて者と看ゟ〇者の言伝ゟ

るに刀さへ出あつぱいに刀をえくりてまるで一向に役にたゝぬ五
分もまとぐる皆妙なり○八十一回荘子三章一芸者にて祝の
宴の座に新参にての接拶両事後の退出を言ひてこれもあ
りがたぬぜる前後の矛盾なり今こゝ高ふくて名をこ〳〵郷武豊
宮殿ゞ残忍なる所明みをとて屠殺せ〳〵そこ逃報急まりて接見
せるのこゝろとゞて死殺をとゞ〳〵埋葬ぜずして虎狼〳〵両賊の
首さへ屠殺〳〵する皆天後の奥様と騒〳〵して汚名をのこ
さる都徳是なり〳〵○八十二回毛野荘子刀剣を法ぜる
仲ゆゑつて小毒薬をもつて解〳〵名義方明に設けてし

毛野が法力を強くなる者義の白腸法量して蔵此
荘子り毛野の意中を悟りて小文者をあざめくる旅をとる
あさるふ法度の書量をとゝ孫ゆて拂ゆる者小文者と荘子の
絶前後能動して者明のあり

此上帙一篇の結向八皆下帙の仕場〳〵八輯の眼
目八毒〳〵下帙ゆゑ〳〵こゝ示る

八犬傳八輯下帙拙評

○八十三回穂北の其行り完して亂完を法ぐんとて土義の仮
徒より土を捨てる法のゆゑ〳〵編筆とけりしもとて山文二

世話人が二大士と崇める法華の行者なるべし
[illegible]より出られ二大士八くまく法華経を誦して大法を行ふ
[illegible]行ふ仏像[illegible]ある授[illegible]
と云ふて法の奉祭[illegible]
[illegible]武蔵の忠[illegible]
[illegible]娘の法を[illegible]
[illegible]の四[illegible]の士の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

二獅と名る裏と名るつゝふ高迫の隙より大角小角の両の
木主を[illegible]て先と洲[illegible]
情[illegible]

此場[illegible]別の[illegible]大角水落ふ伴る俗の海[illegible]あり
[illegible]の海[illegible]
水海[illegible]
毛野と[illegible]牛[illegible]
軽業の[illegible]
[illegible]

ゑ手せずんハあゝぞ。みぬ既ハ道長卿伝の西人とも勝を
まゝ四ゑ君祇師ゑ方面伝説をゝくもあゝぞ文
ゆ書て出ぬゑゝどのゆゑゝ有がゆゝくゑゝもまゝ出ぬゆゑ
ゆ渡八ゞ祇ゝ祇ゝ出ぬと道長ゞ出てゑゝ川づゝて伝
乃ゞ有ゑゝ立ゆゑ立ゆゑ方つて立ゆ月ゆゑゑゝ人の方ゑ見れ
バ祇ゆゝ〜ゆ八ゞ方ゑゑゝも道長伝ゑの英雄ゑ立ゆゑ立て△
立角の年ゆゆゝ〜ゆゝゞ山ゑゑゝゞゝ立ゑゝ立ゑゝ
それハゑゝの祇ゑゑゝ祇ゑゝ祇ゑゝ祇ゑゝ祇ゑゝ
見ハひゞ見ひゑゝ膳見ハゑゝのゞゝ

○八十五回○八十六回
右の伴ハ勢州堅実の評論ゆゑ立てゝ立れハ方実
ゆゑゞ訥弁ゆゑ立ゑゞゝもあゝぞ写ゝ〜
○八十七回〜大ゞ行伝の妖怪ゆ自注又ハ堅実の評ゆ堅
れれハ祇ゆゑ立ゑゞき祇ゑゝれどゑて〜大ゞ殺絶ゆて賊を
殺ゆ〜ハ行ゑ妖ゑゝゑゝ月ゑゝ見ゑゝ出ゑゝ
自ゑ居ゑ祇ゑゑゑゞる勿論ゑれゞゑゑゝ池のゑゑ樹ゆ
ゞゞ金芝年の花ゆゝゑゑ伝ゑゑ撰ゑゑゑ伝ゑゑゞ
ゑゑゑ殺ゑて殺ゆ〜ハ初輪の写山の限伝説を遊て

法施をして経をよむ四種三昧をあらんは法施をしてあるまゝ
をもはゞ一ハ法施をして脈を通じて無生を悟る所の百
然者如来をゝ通を神力をめしふハ法を立てハ中ハ解り
法く実ちゝるなんらこと之ど光脈之のまゝと況を
、大ゞ衆くこの教網はまゝなり地獄三塗の苦法を
宇宙して衆生の苦を力を用ひ無ハ仏意をけつぎと
の流ゝ化法の奥を宣尊し
○八十八回法華社会の情況ひてよゝ蓮華の言葉より
十八般二十八般の説教の法華の説教相の海兵舎敵の相の

是此句ゝ法華はじめうて言葉中の説稱法の門の海の
如をぬゝ新こが法をして真実義をの仏陀法華のる
の姿皆手脚りて大ゆ宜ゝ是と法のてゆゝ法ばんバ木を舞ら
九も次第ちも弟子あれかと新ハ子と本之舞をを非ふ
つらひて法華の研究ゝ法華をう物ゆ繋ぐゝ多をとうう又
元の主のゆゆ仏ゆ如ど水の中めつくらめゝ法ととゝて絵で
妙ゆう教毛脚が次第ちの完を教員ちなゝ教の法ゆ多き
所ゝ法と新ゝて次第ちと極ゆ行本ゝ法と教ゆ早業ゆ
初御ゆうて解ちの人生ゝふ教ゆう後儀の便宜を

[illegible]
[illegible]
○八十九回目八輯下仲平の土佐守にて社壇の[illegible]
あひしらひ遊ものかりかたにて「あやつり猫[illegible]の作
世話物者の書ハ清ぶ[illegible]情ふ性にて初めの[illegible]
ほふ[illegible]を[illegible]ぶ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]
の徒の頭上の一件と言ぶ〳〵勧懲[illegible]

一つの勝ゑあり解説のかの作員白井の清月ふ菅神の
雪景を書かれしう足の[illegible]穂北にて重子ハ[illegible]
伏姫の[illegible]を書かれしもあふ[illegible]と[illegible]
[illegible]
二大士の死をとゝめてべし伝て[illegible]二大士ハ遊れ
[illegible]解説のかハ足[illegible]ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

神明の冥助ふかく〜虚空にあり空中に虚あり
虚空に不二美をあれば神明の冥慮あれば仏井の
四方を祓ひ五色紙自生神通不可思議の作者明神の
胸臆の奇〜絶妙言葉ふかく〜感佩〜〜〇九十回
八十八九二回あて歓楽の論弁〜り刀法坐禅の討論
四方の摂受の法論より出べて限〜〜事〜〜そは次〜毛野
徒儀の法と嗣法八月之き給ふ代句論の〜〜事〜〜陰〜〜
物〜と服掌して主の世法論〜〜て船長の夜叉の場
器宝〜〜元中世不淫婦の徒の〜〜長繁〜〜も一場八人西

宮恵〜〜て妻〜〜〜〜〜り宮高高宮家〜〜〜〜〜〜〜〜〜
一度祝祭〜〜て放逸〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
不良婦の徒〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
逆〜〜〜〜り此回滑稽の内〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
此所〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

あるまじけんといへり鬼界中もまたに是を同し人ハ鬼と
よぶべき人を鉢あまて婦妻に嫁し人ハ恐ろしき奸
悪の者あるも有無にかゝはらず善悪の人にかゝはらず斬る者ある
されバこそ非業に死殺の横死をとげたり是利害の為
道ならねば正人の身にも八ツ当りなれど小文字を数ゆるなんで
閻羅地獄の冥途にあらずに二字の内の二大字に含めた
ものより此所現在の地獄の体なりとも推しはかりぬべし
○九十一回 此所六大字の書法なれども繰りかへしてより是ニ
手本に書き出て事なれバどうしてかかるやらんと思

ふれては道理なれども道理が人数の罪のなきもまた世の
事にて一旦あり人ハ強欲の悪念の体なりし者の
数とせよ殺死の起しとなりて者の人々で肴屋の怖快など
鳴きたる所ありより見ゆる者の事なりとよふりえて
和漢と続きて書なり
前に一つの跡ありけり中にも悪役原首として語りし者ハ
馬加大記にて悪役原を数ゆる者ハ鈍山逸東太なれ
ども両人とも逃して悪役原の息子とのとし
妻子従類を亡ぼし本意をとげさせる誅罰の誅とと

如斯なれば毛野は無四郎中船長の両人なり毛野は
大祝逸事なるを聞きとり船長を殺すべき事なり
ら無知なる芸州の大毛野が未生ひ多くて船長は
あり事を知るまじ毛野は海の毛野もとより我が両
人の敵なりとして馬加竜山のもとへ船長のもい
方あるべしいろ〳〵なれども仕方船長は斗
筆の職婦なれども三人の賊まの妻となり妖怪の
後妻となり継子姫婦を上無ばなる程遠と深て
敷きなる時小文吾と謀り偏のもと敷を計侍邪

淫毒悪なる八大傳中一番一なる者なり妻を見一面りに
毛野は船長を八天罰誅なるに仕方なく伴う伯て行くまで
夜明るまで落ちれ去るも改五の地獄なる間宮流
麻の西者宮ゆく鬼牛の刻長四寸と称なる極刑の
器上悔情なれども無傷毛野は生くなる人数の
内加入せてもよろしきなり侍〳〵是を聞きの
送徳を言ひ〳〵小文吾を捕ふ出せたるまて船長は
よろ〳〵九ども毛野が此傷加入ぬ人なのでとて
なり形五郎の深き構思あるべりれども中みが出いた

ら故ありて官を辞して大石の災を拯ひ給へり

辰十二月

○国に死す賢友の評かゝ大の賊と野盗所詮ぞ拒ぎ
ありてかを殺す方宜しく人死とあるを小子が愚考ハ只
と異なり此時大小一役なれ如何ぞ大の賊
を殺さゝハ任侠斗りなれずして富山の陣の思慮を
且ハ大義とする編ハ法花と共に多く殺さんとも
出来ぬ故と異なり最初大勝の法にて伏姫

○土兵ものゝ
覚えひとよ
の馬を撃
例をもて家
又

善良の人
忠義の

を殺さゝハ土兵の過ちなれども是ハ土の好中なりて里
見の勝利なること明らかなり如何ぞ法花お半と云ふ
如きなく過ぎ猶ほ法花ハ長の年
辛の過ぎゆを義とす。第四章ハ市五作と称する玉吉
作ハ善人なれども玉吉の国学と彩生の報を為して
此命ハ不幸なり之ハ源内等のやき皆悪人ハ法
花をして英雄と生れしもの徳義人ハ為に法花を
効と況んや絶一冨のこゝ見たる福善禍淫の
成を暗示給ふ事なり伝つて思ふに大の法花ハ富山

の反對なるあんかと思ふ

○船宴義理等つゝ客の所囲内ちらこゝろより鞦側
をさるゝ時間の遊興ハ船さゝ船さゝ船の
雪宴の有中雪宴ちゝとあるとでも雪宴の様ハ
みゝとおもゝ云ゝ宴ゝ有ゝ船ゝ酒
類二ゝ船とあるゝ遊ゝ船ゝ船ゝ船ゝ
ゝ船ゝ云ゝ船ゝ船ゝ人ゝ非ゝ十人ゝ
情船と様ゝ有ゝ囲内の遊ハ使ゝ
者の場りの遊遊ハ斗り船ゝ船ゝ船ゝ船ゝ

宴ゝ有ゝ場ゝ宴ゝ有ゝ斯ゝ有ゝ人ゝ船ゝ
船ゝ船ゝ有ゝ有ゝ有ゝ蒲鉾ゝ有ゝ
ゝ有ゝ有ゝ

○此編中ゝ人ゝ膳ゝ人ゝ八ゝ様ゝ人ゝ斗ゝ貨ゝ
人ゝ云ゝ人ゝ有ゝ有ゝ銚ゝ孔ゝ酒ゝ呉ゝ
ゝ有ゝ夜ゝ行ゝ有ゝ有ゝ人ゝ有ゝ
妖ゝ有ゝ有ゝ有ゝ有ゝ有ゝ有ゝ
後ゝ船ゝ有ゝ有ゝ船ゝ有ゝ有ゝ
ゝ有ゝ貨ゝ有ゝ有ゝ有ゝ有ゝ

自らの業を拓けり世人奸達のうぶぶを正人君子とし
敵徴〻の油断より家を失ひ文学ぶぬき修り
闘牛の勇あるがごとく異牛の猛烈ふるひて力をあらそ
ふ所異牛と共に〻ふ〻ふ〻まて霧
る所異牛霧つる所病まて盲目の身えず乳ぶ梅
庭の苔ふ成ふ近寄〻〻ゆく去りる家を駆せり元
ゆ〻のおこりより千金の財を蔦母の淫ふ擲つ
ごと〻是ふ八敵徴のかくふ所ふもべき元
小子りかき随筆の臆見ゆて諸賢の妙評を漫る

足跡を従くを従ふ亡国者の悔ふ元勢の引まて
高明の罵詈を脱るまざ〻んを
のれ〻と河ふ変る詩稿ふ
いろは捧よ集てやむ角式
中下巻〻

里見八犬傳　第九輯中帙

黙老樵者批評

此書の同巻の肇ハ八犬伝刊行の次第なる唐山稗史の法則
ゆゑ委しく徹されする果ては勿論看官と小説の斯ゑ法則云
理ある事を於く知ばは是ものの後和漢の稗史を観るも八犬ハ
まゝ〳〵面ふりゑく亦八勧懲の為ゆもなるやうを徒あるゆ所れて
徹さまてる抱ふて終
末ハ出されする長ゝ反論ハ〻ゝ章句のめでる況ハ論なし此論
筆の述懐ゆく其志をゑるふ是まり總く此序文一件ハ心

右此叙を此の極に成たのハ第百十四回に至て皆此趙末の事実を貞候

なり此看官ハ要なき贅言と思ふべけれど此文を熟く味ひ観ば翁の精細用心を見るに足るべく世の中此戯作者とならしかゞぬを識るよしもあるべし

第百四回

老侯に謁して親兵衛神助を訟ふ
奇特に驚きて刺客等各帰順す

此回本書にも謂まし如く此より出づる大江の初ぞ出で来るをひとつ花咲せし大役を殊さまでの看官の待に待る甲斐ありて大に愉快申すまでもなし但し一通りにみる時ハ纔九歳の小童の斯る智勇ハ餘り似気なき様なれども既に注しゝと甘羅が如き才子あり又

反是作者の用目之照對反對を詳にするも此等の事この評者に勝れる所実に目心の事なくあれども其分きなるくべてに絶るの評をへ見るまでの尽くていと疎なるにけり多く評者各此等を知ることあるべきあれかなるべし評よりぬき精妙

近ては大童山文五郎が如き年十八歳にて紀大なる例とあれハ然ふ紀大生長せしを怪しとも謂がたし況や神童の擁護あるに於てを更に無理の頼句にあらず救此回の頼句の建て初篇冨山の段と相照應し又反對する事とみえてより先初篇にハ伏姫が安西誅伏落城の事より起りて冨山に入給ふ茲には老侯の奉藤が人質となりて篭城する事より起りて冨山にて姫と老侯と男女老若反對にして又落城と篭城と反對なり金碗大輔ハ姫を救むとして過て姫に疵つけ親兵衛ハ神の命によりて孫従を誘く老侯を救ふ彼ハ鉄砲にて誤ち姫を殺し此ハ奇異にて

姫刀・袖の遺据ゑ
妙評まぐ〳〵

弦切まさり八房の犬を紿ふ若ハ大輔まさ人ゆて老虎を踞ゆ〳〵
来つる若ハ五人之是皆反對をふ〳〵徒らまさつる此所ゆて紀長清
乙ゞ口づゝ名案ても鐙ゆ〳〵紀所を伏姫の鞍刀〳〵沖猟の袖ゆ〳〵
夫と知るさ故此一回ゆても頗る銀一所多り尚後〳〵の件と又〳〵
知るべし

第百五回

名山霊有り枯樹復花さく
逃客路元〳〵老侠俘を献る

前百四回ハ此百五回の緒之叔此回ハ先紀長清ハ桃を弟と見
立て〳〵絵を画て父郎あり姫あり山川あり又枯樹ハ花姫有て

照応反對ひとつも
ゆゑ〳〵詳〳〵
ゆゑ〳〵精細〳〵〵

總て昔話を形容せ〳〵まさつる此所謂文面の化粧なり又義ゆも
照應反對あり曳手單節ゆ掌る馬の後脚ハ撃まて斃
なるハ八房の犬の斃るゝと惡逆せり二女ハ幸ゆ〳〵て金を伏姫を
不幸ゆ〳〵て命を墜を伏姫を此窟中ゆて姙身ゆ二女も亦品窟
ゆて懷胎せり是も亦照應と反對なり二女ハ現ゆカ二尺八の両夫
有故ゆ其氣ゆ感〳〵ても實の子を産を伏姫ハ交接の道ゆ〳〵旦
夫とさすゞき者無き故鬼胎のゆき物腹中ゆやどりたを家ゆて孤
思ひ人ゆ今の寡婦室女定まる夫無〳〵て有身たゞゝバ俗ゆ云爺
ゆ〳〵子なり物ゆ感〳〵て文接無〳〵て有無たゞゝバ鬼胎ゆて病の

所為おのづから成むを伏姫八犬の英士の乳を啜
二女ハ二嬰児の好男子を産る是皆其やどる所の母乃
貞操と德義より生る也ハ果樹のかきも培養の好
き良木ハ甘美の果を生し痩土惡地ハ生ずる樹ハ苦
渋の果實のるがゆへ是等勸懲の意と合あり又義
實を數手まくまする五人の著麻呂の復立帝安西出未
助天津九三四郎三人ハ其身ハ賢愚ハ兎まれ角まも其
旧領を復さんと思ひ或ハ其主を世ハ出さんと思ハ皆是
未歴ある事なるに南弥六隆ハの両人ハ安垢三が外孫

ふもせよ又其子ぐんあり近と原是匹夫ゆへて獨の三人を等
を同じくもぎき若ハ孤ぞ夫を此場に一所ハきひぬるハ大きハ沃
ある事ゆへん其所以ハ是ゆ後ハ里ゆ後ハ品窟中ハ居し
親兵衛と翁姫夫手單篇等が食料衣服ハ皆里見殿の施
行の餘澤なるゆへ無理ゆへ無理ゆへ最ら神の仁慈ら
里見の仁慈ら出し乙ハ出し乙ハ後る師匠篇通りら一体
此百四百五の二回ハ犬江親兵衛仁再び世ハ出現の原故仁の字を主
らて紀ぐもらりとえてら世四郎夫婦を兵火の内ハ救ひ曳手草
篇を名忘れの内ハ救ひ親兵衛を災難の場ハ助けて品窟中へつど

仁字評し得て精妙

ハし皆是神の仁なり榿木の棒をもて多勢と闘ひ殺さず其悪徒をして命を助け義によりて善心に復させるは親兵衛の仁なり又月毎に食料布などを施行し生擒しける敵を免せしは義実の仁なり皆一事一句として仁ならざる事なし妙といふべし

第百六回

青海波を牽して景能稲村より来る
黒闇夜を犯して曼讃信館山に赴く

此段前にといへるがごとく義実の詞にも仁の字の主意を知らせ且又八士の中にも最年若き親兵衛が老侯へ第一の忠に謁せしは来より八行の随てる仁字の珠を持るゆゑなく事より始終を謂

此ときに求めて応對をなさる作りし上手を評さるべきをさて附会に斷より

この条桂評と同案

べし扨此處へ蜑崎照文等が迎に来る是と紛錦写山の段の反對なく兄の照武は水に落て死し主の先途を見届るなりしに加之五十子の方の卒去悲愁哀患つどひ来りける愁歎場の事より至て照文は別国に老侯の供をし犬士を招得を牽せ意気揚々たるて能も反對を見せたり親兵衛が馬を雇して館山へ行くは堀内貞行が馬を雇して瀧田へ来るの照文と又親兵衛が館山の城内へ行は紛錦の発端義実と後の安西が錦へ赴く反對なるべし其出立の粧も皆見送る人の大勢なるも嗤やうなる總て紛錦の淋しき所は此編にて花麗にして語りし手

見てあハ反對堅固ともかゝ〳〵で又威あきで滅後多を揮ふ

〳〵とゝ〳〵

第百七回　犬江親兵衛活あゞ〳〵素藤と捉ふ

里見御曹司優ふ陣営ふ選ふ

此回最初ふ世四郎と立目立目ゞ持〳〵ホ刀と長刀の来由を義實ふ問せる大〳〵ふ〳〵茲処ハ看官のふ審のふべき事なれいと早く世四郎ふとりせる弥拵員ふ〳〵

此回前あも得ふ如く義實安西ふ錦へるの懸賞ふて素藤帷幕の蔭ふ兵卒を隠〳〵引銃兵器を連ねて武を

早撃の〳〵翠平と日六業

詳ふ〳〵とまり〳〵

詳ふ〳〵遠徹実ふ又功ふ力〳〵ふ

輝やらす拓皆其堅意ひ〳〵り親兵衛を角門ふり入れと世時の立對是平仲ゞ楚ふ使せ〳〵傍ありてふ極ふ〳〵此ふふ〳〵て親兵衛ゞ幼義の若ふも知方の人寡ふ〳〵ゞる事ふも言葉ふ〳〵ふハ作者ゞ親兵衛を借て看官へ言解せる事一体此回ふ〳〵て幼義の親兵衛ゞふふも主僕三人ふて多勢の城内へ行ハふ〳〵ての大役ふ〳〵幼義の若ふハ似ふ〳〵ふ〳〵と思ふ看官も有ハれハ先事の是ふ〳〵ふ往古も去る例多く有〳〵事ふ引出ふ〳〵ふふ〳〵と思ハせる就ふふ〳〵も油断ふ〳〵ふ

雲玉の先輝ふて法人と倒〳〵ふ〳〵素藤を生捕ふ

多くの愉快なる濃田陣を張り玉湾に阿蘭陀の「セキラ」を搖ぶるかと同日の夜なべ〳〵斬出勢を降伏させ後キヤ〻の勢ひ強き中に仁字の印を通じて命令〳〵聽もて義通囚を脫さ〳〵本陣に帰る実常巻を求めて勢と往ぐべきなり

ごとと云る如き者〳〵大将の量を使てる最よ〳〵素藤をば本のごとく待り対敵の宇佐の老を遣て西往て左遣する斯あるべきなれば義通のくりでえけ〳〵と前後左右なりべき手を実ゆ〳〵いろの事とかゆ〳〵感ひあり

併し此前ゆ浮〳〵滅せ〳〵ハ義實の勸言へ多の一所路次世四郎曳手多ぶ物語なるべ拔別要なき中なれども義ハ彼文面の化粧ゆ〳〵道の行よ〻ふ例の妙文句ゆ〳〵感ゆ〳〵御山上の眺を其家面さ〻そと想像せるも今と大倉激突戰文の法りる所と川〻迫ると雖ゆ而ゆ〳〵弘ハ衣服の變りてたく〻ものゆ重ゆ〳〵とらゆ〳〵ゆ〳〵あ彼の乃ふ〻そ〻ゆ〳〵ふ小變ハ此一重ゆ〳〵きつとをとるゆ〳〵なる衣服とゆりるゆり

百四回より此百七回まで大江出現大功の陰ゆて看官の心ハ狼狽大江希代の奇〻童ゆりゆ一人單身ゆて敵城へ入君の

知恵と枝葉とを以て成ぐる事なれば何を発端とする故なの有なるかと行嘸と能てアヤフヤ思せ存の外新奇のまと出て敵の重圍を破り出る且永きを印象の大江を人みて寝覚をとりたてる作者元帥の胸中の神算奇謀八今三八大体中を不見所安中みて安心感服の外なし〳〵妙〳〵

百八回　義成仁を旨として刑を寛くす　貞行主ふ謁して古凡を奏す

此回八素藤降伏して義通の段あれバさして看所ハ尼がかくまもども一三章の内ハ大海の石をきかく下ハ鷲濤波瀾の係を

会あり先年文も有ゆ〳〵素藤ハ大木の上ハ徒せ〳〵を山鉾のかく而やりあて引まるハ父既ハ義報と且義通を虐ゆる無報ゆる事八論なし〳〵彼八百比丘尼の出ゆ〳〵素藤を助ざるハ如何ぞ〳〵看官と倶ハ思ハ人所を案じて本藤を思ひ出ゆる大よし〳〵素藤八最早教さ出めんと思ひ処と親長屋の仁を助ゆる外り完ハ出ゆるかく見ゆ体ハ辰相と親長屋の関係ハ敵王の如事とハ人長の誠とのべる一ハ按目ハ〳〵球ハ城内ハ良民を多く苦め苦ふ所ハ大ゆ〳〵世良民ハ義通出城の供ハ悪徒ハ出せ〳〵又城外の味方を以ハ時ハ時刻おくゆ〳〵所へ良民を信ハ〳〵せて原

緒地の大らかなる
より首ぶること

佳評

独り屋りまて云て世間推津授本の城を降伏の場八備地の
文法ふ〳〵初篇山下定包伏誅の後ふ麻呂安西降伏の備
地と照り為せりの茅ハ移倉氏元を討ふ為して王朝を復ふを茲
ふて八城内自行を討ふ為して拒ふとお絵らせる前後の文を立
ふせふまてるいふも此両老臣八里見補佐草芋の功臣て恵八熟と
一ツ甲乙有て八快らぶ事を逐ふぶ文を立て去抜抗せる最
独心と外ふまてり一体此書長篇大部の物語故初編より追
追新奇百出して譬八千萬條の糸の乱れる如くどうふ可
き収めんとも為ふ難きを結局ふ近く成ふ外前々の編

妙評とこ知るべし

の照為をなして反對をなして百折千曲の勾珠の内を蜜薫珠
莫ふして蛭の糸と引出るが如く黒き糸八黒き処赤き糸八赤き処と夫々
其処八変り来るいつも紛紛乱を解く処実ふ奇〳〵妙〳〵自作の
汎々の作者八名て〳〵と似り寄げるを結局ふ到りて急ふ取収め
ともる故前後の紛冗ふ成るも拙ぞ或八混脱或八重複有るへふ
行止りの街へ行るが如く行文て住方ふ困て国図の
法を問とする物寡ふして為ふに此篇の作八ふ〳〵微物る機変更
ふ繁量且て上約未ふ〳〵整〳〵傍験ふあるなし此編抜とふ〳〵
思ひ入ふ初編より毎編大士の輩十二三員あるを幸ふ〳〵皆夫々の

投迎りを附〳〵偏頗なく親無清を人は幼少の時ちらとあて其後家九輯ふゑ〳〵再びあるあるゝ花やかなる役目いつたんとを旅〳〵と思ひ量れども新大役を附〳〵を人みて九輯一編の舞台を拵へる軽重用捨の斤量を能御命〳〵もてる最妙なり文初ふ中子等が思ひ〳〵は此編中信乃と毛乃とが八士中の校廿平なるんをを如何ふぞといふ右両人の最初は女頼なり是伏姫の神霊ふ感恵ふる新深さが故ふ男ふして婦の頼ふして又せ〳〵は母の意と雷せ〳〵恵〳〵変此両士ふあんと思ひ居るり故親を信ふ仁字の陣を授けられて〳〵意を悟〳〵ぎり〳〵が後ふ此大役を当るまんの

獲芸来りんとふつや〳〵思ひひざりに但〳〵かふ双紙お役をつゞふ役の人作り此軽重用捨出没の量斤を如何ぞる者あんか御ゝと難ども年ふ書採事〳〵容易ふ作〳〵劇場ふゞも役不足出来〳〵毎度口論あり其故ふ劇場ふも不張当時人の上ふ〳〵多くの男女を拵役るもそうでうし彼漢の陳平ゞ微なり〳〵時条の肉を組上ふ飾り〳〵も其斤量拝数餘人の及ばぬ所有〳〵なり〳〵ぞや篇ハ年墨主著作中の陳平なり其机上ふ斤量の肉を頒つ妙技を嘗観ぞ〳〵返〳〵も九編中帙の一編親を信を主人公として数多の客ふ逸接を文を主附れ

たる実ふ感ぜとなる仏りあり

第百九回　八百尼山居ふ敗將を誘引ふ　濱路姫病牀ふ寃鬼ふ厭魅ふ

此回人もこのべきふいりふ功を貴〳〵郭隗の例〳〵ふ倣ふとハ雖
未ざ徳角の若老を〳〵て鎗山の城まで〳〵一郡の政を任さ
ぐ〳〵しめふハ餘ふ重用〳〵て其任ふ堪てるらんと思ひ〳〵ふ足れ
ふ妙椿を引出せ觀深なる〳〵んと思ハふ親兵衛稲村ふ
ある時ハ妙椿の妖術も施〳〵ぐ〳〵ふ伝る先大江ハ鎗山ふ在
さらの乙加減ふ考らるべ〳〵又響ふ老度ふあ〳〵せ〳〵

この解理屋ふ近〳〵親兵衛と九才の童子とふ〳〵あり〳〵るこの理論ハいと長ふ餘ハ〳〵年を経の折義成の祠ふ詣ハ非常の大功あり非常ふ非常の賞ふ〳〵んやとあれハ年の多ふ中ふ〳〵んの要ふ〳〵

五人の處治も施行ふ中きかり義成ハ去年ふ〳〵て能〳〵ふ功列あるとも又其ふ依せ〳〵若ハ助〳〵ぐ〳〵ふ為るとぬ〳〵ず義實ふ云こと得ぬ〳〵ふ五人の助命ふ中きまる抔一々仔要の所を述〳〵ぬ〳〵ふ素藤追放ふ〳〵ふ侍ハ初倫里見義實の妹て安房ふ〳〵流浪せ〳〵の恩ふ〳〵ん義實ハ金碗を授〳〵義を唱へ義兵をつどへ〳〵軍を起せ或ハ乏ふ飢〳〵土民の鬼ふ塊を掠ひ〳〵まる又孤の場あ〳〵ぐ〳〵の事〳〵素藤ハ飢ふ餓ふ〳〵〳〵義を切割竜を切妙椿ふ遇〳〵〳〵逆徒をつどへ再叛〳〵〳〵皆初倫の反對

この無ふ感の解ハ非あり

柏葉堂蔵

女児ね評

八百の精評ハそりうれしきの事評ゐよしからん是ゟ評をへき気之
妙椿の本相ハ古児孝嶺が在世の日犬てえ判あの度妖をるゝ
丸犢上唆の再評あど事をとられて評ゐ予黙二相もるの一人

なゐふん報素藤ハ妙椿の山居ふ篭り居く酒肴ふ足り待
し八親兵衛が冨山の岩窟ふ在るを反対あり世四郎以下の
者共く神より給の一衣食ハ元義実の慈善の施より
出る物ふく出所正しく明之妙椿が蟇田ふ贈る酒食ハ
出所但あらもて不正の物ふてゐらゆでも知れ?るる之
因ふ云此妙椿の名ハ八百と云より思ひよしおふん元
妙椿の本相ハかの玉面嬢と称せし物ふく初冨山ふ出
らる八房の犬ふ乳房をあたへし狸此物いらある故り
里見を怨る事ありて最初ふ死ふかんく出る

書ふ初解第八回の狸の犬のまゝこえてむ穴まゝ見てよく見の外ゐひ弟子ゐ子ゐあら人ふ又狸ふ玉梓の怨のこりしとかつえゐ見ゐいうなるや

名の念世谷口みるけ解き好事家の答評中ふあり因て而ゐ竹きて見のへし

八房の犬を養て里見ふ讐をさせ又素藤の悪を
助て暴虐をさするなんふん其仇あるを記ハ九編下
帙結局ふ到らざれハ解りがたし
南無隊張陀伽の字ハ妖怪の名阿弥陀の字を憚るハ勿論なが
此話ハ名字あも義理ありげあれど其ゆゑ経文の教く宗観知べく
と抛ず家ふて妙椿の自解ふて親兵衛が館山ふ入る時出く素友
等と聞が々を明し所持の珠の優劣を語りて勝敗の理を論じ
ふると徳用紀之より妙椿が以前より若やぎて婀娜めきさるハ素藤
を濫ふ道きて再叛の心をおこし叛をさするらハ唐山の平妖傳ふ

柏葉堂藏

胡乗兒が王則を逆意示道導きうと彷彿たり人不入山ハ冨山の反對
貞烈孝義類稀き伏姫の神霊ハ妖術顕妙の妙椿と反對し
艶にも霊妙不可思議なれども邪正地を異にするハ神霊と
幻術と不異勧懲の筆を能も艶まるまてり又濱路姫の病脳
より洌冷明神の代理を立てまく仙翁を遣るハ初編小伏姫
の病魔ふより洌冷代理を立て行者の手沢と異なるの差ふ
念珠を授りて病魔を退ろ仁玉を授りて病魔と拝ふと
ろ皆思意ふ〳〵事跡ハ同〳〵なれども神妖逢ることなれバ宮ハ
返對り斯ふ微妙の筆と採らん者小角の霊験或ハ

伏姫の神威なりも猶妙と謂ふ〳〵而已

第百十回　反間の術妙椿犬江を遠さ〳〵　妖書の薬仁妙眞ふ辭別も

此回妙椿ゞ妖書の艶文義成ふ燈臺の火ゝて焼せ〳〵最
妙なり此妖書日を経〳〵白紙ふりて反間の術行ふまゞ〳〵
焼棄し〳〵ハ妙なるべ義成ハ其子其臣の為ふ悪名と匿む
故ふ焼〳〵ふ〳〵ハ毒理ふ〳〵ぞ是初編仙翁の文使ふて堀内貞行
を召ふて〳〵ぐ〳〵狀の白紙ふ〳〵と照意の反對ふり親兵
清が宿直ふ〳〵ふ〳〵を土ふ埋〳〵まふ〳〵ふ〳〵ハ親兵房の英氣

五分を缺くるゆゑ妖魔其間ゆゑ〳〵義成と盞盃〳〵男女私情
の談を語りて互に艷書の白紙を落して義成ゆゑ拾ひ取る皆
悉無かりし但此艷書り否ハ焼棄〳〵故紀ごろと後ゆゑ吾嬬の前
の拾ひ〳〵艷書と白紙なるゆゑ〳〵扨ハ嬬のも斯あてゞかりとゆゑ
謹ゆゑ〳〵前後の偉(シメクリ)担て物いるかゆゑ玉を埋るハ妖邪の自入
魔死為ゆゑ〳〵又親五郎ハ玉の冥助ゆゑ離も宿直ゆゑ眠睡眠
の間ゆゑ義成の来ると不知知ゆゑ〳〵心を付〳〵まてゆゑ
又為ゆゑ一ツの談あるハ親五郎ハ八士の内なれ共殊の神の冥助
深ゆゑ者なゆゑ妙椿が邪謀を行ゆゑ列〳〵是が為ゆゑ

玉を埋る艷書の邪計あて親五郎ハ非命ゆゑ殺さるゝと
する動ゆゑ幸ゆゑて脱るゝ共ゆゑ寛恕ありて追ゆゑ
かゝてハ神の加護なゆゑ仏ゆゑ是ゆゑハ人のゆゑん
ざるめど為ハ素藤り擒せ〳〵て黙せるゝ城を落るゝを
〳〵追ゆゑ〳〵ゆゑ聖ゆゑ〳〵ん佛経ゆゑ脩羅帝釋
の闘のゆゑ脩羅盛んなる時ハ帝釋退き帝釋強き時を
脩羅医ゆゑ是世の中の事実来ゆゑバ夏往き栄枯盛衰
無きことゆゑず妖魔時運ゆゑ等ゆゑる者ハ神等と敵いん
ともゆゑる難〳〵且餘七大士ハ十數年の間百折千磨の

艱苦を嘗竭してまづ里見侯に謁せん犬江八士第一
の如義なりて都て里見侯に謁し大功を建て一城の主と
なり飯の七士も義を慕ひ業達と早くとつのべり殊に
亦百折千磨の苦と雖せん犬江追ふ八是をして苦中
の苦を喫せしめる神の妙智力なりん猶此性を養ひて
行ハ犬江を追ふ法の用る所の場あらん
犬江旅亭の所々祖母妙眞が宅へ立寄て悲歎哀傷詞多く
いひずして看官の察推せる文餘情ありて感深し此處
里見侯の世四郎を遣せる犬江が賜金を祖母に頒ち勝る
ものゝ事ハ志量なり

第百十一回

妖尼庭に衆凶を聚ふ
素藤夜舊城を襲ふ

此回犬江が稲村を辭して去て船に乗せし時仁字の受王復
旧主に返る大なる叛義成ハ殿臺の三社の神主を上為選て又
老侯に仕へ大人の陰著いとゝ第一王耳理墨之介といふ者無
不ずして麻呂安西の後さあるに神餘光弘ハ忠言を拒て酒色に
耽て暗君なれども夢て奸悪の人に抵て是をして後あるに

翠軒と日案

りん八幸意ふ〜如ども墨之介文智人並ふ〜八義成八仁讓の君
國をゆづらる事をゆゑ〜支故墨之介を廉人ふ〜ゆる方よ〜天津
八素〜より忠直の士人各其主の為ふを主人の出世をの〜男ハて里見
ふ雖せ〜八思ひ違ひめる諫めれバ免ず〜斬〜墨之介ふ天津を
附〜本領安堵させる仁忠二つゆゑ〜其ことゆゑより出来ず復五
郎の両人八安西麻呂の親族あ〜南弥六八扑平無垢三ゆ義ゆ矛
せ〜バ一所ふ出るも皆據あり殊ふ墨より落ふ各一役ゆ當ら色
なれバ其因あり唯墨八主人の八眼を知り古人ゆ功ゆ生産業
ふ在ゆて活ゆ〜バ義一所ふ出るも要なき故なり初之

この歌評慈
茅舎ゆ仰ぎ
み〜

慈之歌評ゆも
仰ぎ〜ニを
列る冊子なり

老彦ふ雖せ〜時五人の彩ふ〜ゆ〜ゆ〜ふ五の員ふ充、
なる八邪ふ法あり事ゆ
又知れまろんゆ八邪〜取ども試ゆ中さんハ戯場の所
作事の切〜の場ゆて捕ゆ拔あて所作ふ成なる時
四てんの捕ゆとう云て捕ゆ四人ふ頭ふ〜ゆ者ふ人ゆ各五人
ゆる〜ゆあり本書の絵ゆ〜ゆ加其絵ふ彷彿ゆ拔く
ゆ之八画工の心ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆる〜ゆる老先生のいでら
ゆ〜ふ法ゆ〜ゆ如絵ゆ〜ゆ〜ゆ子ゆ男拔ゆ八逐八ゆ〜ゆ
ゆる意ゆ何ゆも量ゆ〜先生の明解を俟而已

柏葉堂蔵

妙椿が咒文を唱へ法をして強兵を惑はしハ金碗が野火と
〳〵義兵と集るとし聖武天皇の又甕襲の王とてあるとのハ
八士の素王の反對なりうゑ方て仁子の王の反對なり甕襲の
王り〳〵怪風と起〳〵兵器を吹出さ〳〵るハ西遊記の孫悟
空が風り〳〵兵器を吹る〳〵仲哀天皇妙椿轎子ふのりて舘山
の城ふ入り素藤が多勢を率〳〵威氣揚たるハ大將江が素
藤を擒ゝて義通轎子ふ乗て城を出るの聖武天皇素藤
が兵卒暗夜ふ眼り〳〵ふして殊ふ妙椿が術ふて敵ふて數千の
人數とうせ容易ふ舘山の城を一取返せ〳〵ハ大江が早速ふて

この反對も仁子の
ちゝ

西北院の〳〵翠簾
二詩とハ出ふ

聖武天皇の〳〵
ふのりとうとうふ
いとゝとあるべし

多勢の人を壓倒〳〵容易ふ城を取ると反對なり但し一聚るの
容易ふれハ取〳〵る事も容易なり戦さうく〳〵なるあハまさうろ
て出るの陣ふ〳〵人行りとて怪〳〵まざれハ皆斬のごとし妙椿が達
城内ふハ昔の脱路あれども千畳の石〳〵塞ぎとてハ些後ふ
復城の陣入べき觀深なりうんぬ又叅桐山八を生擒〳〵と教さぞ
獄舍ふ繋ふれおれるも後ふ落城の觀深ふ如なりうんぬ

此甕襲の王といふものハ何なる物なりうんぬ手ぶ異獣ふハ
狢(ムジナ)の王といふ物あり〳〵由古記ふ見えたれハ狢(ムジナ)も狸と
同類なれハ弱〳〵ハ狸の王なり〳〵んぬ

古見美濃ふ出と
日京 精妙 名を
この觀深いのあなた
ふらんとまちのくた
るあるあるとも

この玉の〳〵初編第
八回大みの村の條
ふ出ふ翠簾桂二詩と
ありとあるとみる表れ
あるべし

中帙上之巻是〻〻終る依〻再評〻浅せ〻

を為み奉ぐ

富山の伴ふ大江が神変ふ教をみるを初る一所ふ五番平八行の理を述中ふも仁字ハ至つて尊きものと解せる大〻〻〻此解釋あるより最初ふ五人の間諜を助け又鎧山の城を落〻て素藤を初數百の悪徒を疵つけ殺さるる皆仁の字ふ徳叶へり

峯の観音へ詣する義實の篤實をもつてされ乃るやうふ

初ふも浮せ〻ふ〻文面の仏粧世四帝立音音戒千草幕名

ふ物語の為ふせ〻而もふ〻〻此富山の二回ふて八皆伏姫の神助堂験あれバ富平是ふて義實八帰山をべき名ふを観音の冥助ふんも量ぶ〻〻とて登山せ〻八伏姫の霊感をもとせ観世音ふ功を譲りる禮譲を示せ〻ふんも

第百十二回　君命を稟く清澄再敵の賊を伐り機変を旋ら〻素藤牛狼の囚を易も

此回素藤再敵の間え〻処ふ〻評議の段ふ里見の四老臣が大江が佛心ふ〻素藤を助け〻故却〻ふ〻ふ禍を門出せを早〻大江を呼返へ〻て鎧山を討ちんと論せ〻八並々の看官

の心も皆ちがうぞうしく望みと義成の爰へハ是非邪正明白ゆえ實に
一段折ふしの思慮と爰〳〵但〳〵大江を呼返すハ既ゆ家務ゆ若
素藤再叛せバ人々と備ふべ單身ゆゆ誅伐もべしと謂ふれば
大江をゆで討るゆ論ある可き呼事の名然ハ疑心の解さと一ト
〳〵びゑ〳〵千慮一失の一言駟も追ふ及ばるゆと微ゆ毫厘の違
千里を遠ちて義成祖の賢君ゆも斬る失ちゆ況や自餘
の人ゆおそれや怪ふべんや叔清澄戦負る件ゆ復五郎を金
瘡児ゆ〳〵ふる浦安牛助を生擒ふる大ゆ〳〵復五郎ゆを負
ぶバ後ゆ南弥六出来ゆ多と一因ゆ鎧山へ〳〵ぶる事を知ふ

ひて金瘡児ゆ〳〵ふる故出来ゆ遺書を置所ゆもよ〳〵美〳〵乃
都合〳〵〳〵牛助ゆ擒せ〳〵ゆ〳〵ハ後ゆ鎧山を落せ親保ゆ人ゆ
登梱山ハと同〳〵ゆ人ゆ奥利狼之助ゆ羽賀の夜討の敗軍ハ
清澄ゆ一花持せて一勝一敗二将を擒せ〳〵ゆ〳〵二将を擒に
ふる互角の闘ゆ〳〵ふる大ゆ〳〵此羽賀の野陣ゆて小ゆ〳〵寛字の
戒も守ら難ふるを殿の臺の地へ軍営を移させふる可も板見姫
奥利狼之助の孫の逃ふると跡を慕ゆハ送り狼の名詮自証ゆて
いろもふ〳〵一ツもむづふゆ〳〵登梱牛助二人ゆ〳〵礪時狼之助の両
人と交易ハ例ある事ゆゆ〳〵妙椿の幻術ゆ〳〵草偈児を殺送

平伝傳の草稿
翠平評も同案
三平伝傳の草稿

つゝる平妖傳の草稿を縛ゝせる傍ゝて新奇之清澄稲
材へ注進状を出来仕ゝる在遣ハ一没分る而もゝで法ゝ南弥
六が舘山へ入る張本ゝ〳〵ん

第百十三回　三匹の瓶里見侯を醒そ　一級の首南弥六を衍い

此回牛狼因を更る義成の辨論を妙ゝり且盗跖が孔子を譏
る事を引出ゝ清澄の妖尼ゝ幻惑せらるゝも清澄の智勇
ゝる心宝ゝきゝと看官ゝ悟ゝそゝる平妖傳の弾和尚が龍圖
公を幻惑せゝ〳〵係の如ゝ〳〵ゝ又一ツ妙ゝる八仁字の玉の出ゝ

好評
程遠ハ二評と同案

場ゝ所を義成妖尼の幻術ゝ困ゝ果ゝ仁字の玉ゝて妖術
を壁そんゝゝ貧子の下へ埋ゝ玉を掘出見て玉の紛失ゝて狐
他の寶を取て自の衛ゝせんゝゝる衍を醒悟ゝたる是ゝ〳〵
犬江を彩心を五分を解せ又寛字の心を起させるもよろし
南弥六出来仕二人が素藤を狙ひ撃謀を示ゝ〳〵て後南
弥六八硯箱ゝ送書を匿ゝ置出来仕八復五郎が屏風の後ゝ
送書を匿ゝ置ゝる筋旅離て最ゝ〳〵又後ゝ廻ゝ〳〵て
の妙處あるハ妙椿が濱路姫を取ゝて舘山の城を出ゝ〳〵り其
虚の処へ南弥六出来仕八今ゝを得ゝり此両人既ゝ素藤を

相模堂蔵

毅手まゝ〳〵て本膳等の悪徒の手ゆ餘りしる延へ妙椿のうへ
来る術をいゝ〳〵両人を壓勝しる彼出まハ足ゆり足出まハ
彼ゆる神出鬼没の趣向奇〳〵妙〳〵此出入而もゆくハ丈面ゆ
化粧ゆ〳〵んを南弥六ハ首級を携て鎧山ゆ刻き妙椿濱路姫
を擒ゆて鎧山ゆ還る途中ゆく出遇ふ所一人ハ男子ゆて男の
死頸を携へ一人ハ婦人ゆく活る婦人を抱く丈を互ゆ〳〵なる働
夫より妖尼の術ゆハ南弥六も克ゆ不能十分ゆ勝をこ
ゝ〳〵ゆ處伏姫神灵出〳〵妖尼を壓勝しる實ゆ強中又強
中の手ありゆ〳〵其上神女ハ姫を助け瑞雲ゆ乗りて空ゆ升を

妖尼ハ跡形〳〵消亡ゆ変幻微妙の筆なるゆ素藤ハ碼時
奥利の両人を得又妙椿と添臥して尚妄想罷もゆ〳〵妙椿ゆ
清ゆ處小人奸徒の情態他ゆ〳〵ゆ妙椿城ハ前書の
機変忽ち行ふゆ南弥六死命を免〳〵阿弥七ゆ方へ暇乞ゆ
行く處増松を養嗣ゆ〳〵ゆ夫而已ゆ出来ゆ一
人の子あ〳〵ゆ此両人ハ義侠の者ゆ〳〵ゆ闘死て
後なゆ〳〵ゆ人ハ遺孤のゆて勧懲ゆもまた〳〵ゆ
ゆ出来ゆ子ハ南弥六ハ養嗣ゆて両人ハ〳〵死ゆ
えありゆ〳〵又阿弥七の子ゆ阿弥太郎あり是等を

相模堂蔵

怒着をれバ妙椿ゞ庵ふ懸さる六字の名號阿弥陀の三字を忘ゆ〜あつ〜字体〜巻たゞこゝひし〜ハ此父子名の名ふりて忘るゝあるふ〜あ〜んぎ〜ん翁の妙作後〜この編を予名ゞ知るべきふ祇ぞれど若〜ハ斯なるんりと推せ〜ふ

第百十四回　義侠元を瘞く郭歸を送る

神霊魔を懲して處女を全す

此回素藤ゞ首實検の段ハ荆軻専諸ゆゞの趣をうつされたる妙椿ゞ金瘡の妙薬り〜素藤の疵を瘞し〜ハ嚮ふ大江ゞ神より授さ〜神茅めて眼ゞの疵を瘞し〜なる反對ゞり又

南弥六ゞ素藤を擊ん〜進し〜ハり妙椿ゞさ〜〜還りてハ妙ゞ〜ゞ去ゞて道ふ障取ゞき訳もなし〜神女ふ身を跳らもて其痛この堪ゞさふ路の樹落ゆて気を頽し漸〜還り来つるとゝゆ〜他ハ別の故ゞと会ゞ〜り南弥六ゞ首級ふ奇異あり〜ふ驚ゞ〜軻遇ハゞ沙雁太の首を代ふ梟首せ〜ハ絶倒ゞ〜ゞ〜又其首級を清澄ゞ返さ〜て軻遇ハも暗ふ罪を助り逸友り賊の士卒を擒ゆ〜なるふて南弥六ゞ首を取ゞ〜ゞ〜ゞ遺書のゞ〜ふて義侠い〜り〜顯ゞ〜る諸方の喰会を於も会ゞ〜ゞ〜り又妙の妙〜る所ハ妙椿ゞ濱路姫

伊許

伊許

を取去らるる跡の跡まで犬江を欺かせて仇条の由聞き者ゆせんと
偽の艶書を送せ〜し知て是が白紙なるを〜より以前義成
の婿棄ステ〜艶書も同〜物を奪ん〜と身行直元を召返さ
まを〜妖書の事さへ思の外〜て義成吾嬬の前の氷忽ふ解て
犬江の寃の晴るるを大よろこび犬江を呼返て聟ふせ〜も斉く妙〜
那り伏姫の神霊濱路姫を危急ふ救ひ其温容ふともちふふ
犯でいりで犬江を呼返て緒を解く事あるべく且義成ふ教
誡〜妖尼素藤等を神霊の忽ふ誅を加えぶる由来をあら
〜看官の不審を悉〜譯分させる一句一章ふ遊び無
絶妙奇〜の筆誰か感歎せざらむ

第百十五回

前面岡ふ大刀自孝嗣を救ふ
不忍池ふ親兵衛河鯉を釣る

此回義成の疑念氷解して衍を隠そうなる老臣の手を聚
て説示せ〜大将の量を徹写ん犬江の迎使ふ照文と世
四郎とを遣るも御板目形〜中ゆも新奇ハ稲村より遣す
辰相と滝田より来る照文を入遣ひふ使〜て事ハ一事ふ〜て
暗ふ会せ〜此方ハ諸方の注進と濱路姫が神の手児を蒙
りしるとの義会ふ〜事を怪〜せ滝田の方ハ鸚鵡の聲を

智平君と同妻
故評

仏評

立て云へる事を初めて其鳥も元洲崎へ船来りて去り
も洲崎八役の行者の蓮師の處なる縁を以て此両方の庵
舎を結ぶ考らるるとて殊に此鸚鵡の弧向八是迄の諸小説に
見ざる所なる新奇多々なれど最も感心八照文殿が是
迄孝の困じたる大士を復を尋ね出るに至る孤家の場に
まで也結構、動ぶ嘉きのむ〻諸灵の亡日、大法師の
宿願追善の結願なれば結構なる尋ねんとなる八孤
心の分所なる又他者の巧に結く此を住ぶめを分るまり
此孤向方ぶりせば八方に散住せる大士方と尋れ八方が

他に去れに巡り逢八方が出る所なる如く何年を経て期八
来る方なるを待ると古主の命日と、大士の縁を以て是
非に結構の行せばなる如く尋ねる中と
尋常の他者の考く所なる面所なく感公叔大江八市河く
来る房八夫婦の墓に詣で信乃が実載の八房の梅を看
て懐旧の所より大江屋へ立帰りて故旧の親族の人詩を作り
歌を詠く勝るなど古を尋ねんと思ふ旦氏場八此
主大士の行を送り時に後れる事多れども形に其
時く事習うく重復せば如とてふべく向見の図ゆく

河鯉を殿の大刀自助命の段ハ小文吾荘助と殺さんと
云うと又要の方の沙門太の死を助くるの反對なり其
上に大自も要を多くく助命せんとい要の方も湯嶋の神
の至を多くく助命のをいつ送まてる皆真反對なり
実ふく中あも妙なるハ此大刀自眞の大刀自ふくハ是とこの
心術と府全せず又此所ハ名時ふ者も似つらしげ
神変の化現ハしる最妙なり河鯉助まく不忍の
池のまふく大江と出ふハ毛野と荘助の出ふ祭
行伴ふり殺く初めも云しかく進く國國ふまく

柳葉堂蔵

平妖伝のるの秘密の
ふ[illegible]ふ[illegible]
伝をを

低大刀自の
茶ふの老婆の
疑を所くを
ふのれをハ化神の
まりく[illegible]
[illegible]老刀自

是との件々を聚意反對を取りく前編の巻く小喰会
まてる実ふ奇く妙くを
又中城を河鯉孝嗣ハ後ふ舘山の城を落を役人の第一
ふやつりまやん平妖傳の李魚美ふ思ひ為てや似り落ひ
けん拍ふ向見園の茶店の光孝婆も只者とハ見え伝くて
是なの事ハ下帙農版の時ふくでハ誰り真當者を識る
よしのしんりなまでも中が憶後を先中をふて於

柳葉堂蔵

天保七丙申彌生中澣　　默老

默老翁本輯の批評さ沢くる勝りしとかたて　照意反對を
とえしてとる他評を超て甚こうるれとも　もと又編さ　と又論
あるいてこの解りこ向るとも其の照對他の反對をとらるれ他者の
一ひとん解りあてすのくるこう向さ　程評の甚きいるとへすて物を
對をとてこ他んとく論るるものあるとこ向ゆこ其の照
對敵に其の照意をもて或い反對をやとく他の論るるあり
句論をれたも稀さ者のつて照對反對をなるうめる論句の甚
こもあり他七周目の照對反對をとてくてこれ評者鑒定
の論をとまるいまあ對意のいとも評者の恥とあるとも

精評のいとゝ多くして中にもてはやされし翠玉実の巻まいかゝ
ゆゝ

第百十一回の評評 南洗堂五名の刺客因敵の評 唯蓬八
主人、毎回のごとくれて五人の数を合されし難劇を云ふの
あれども、いとゝ多くの者なれども、敵にも知られしも知らざるまで
その刺客は五人を限りとなれども三人共に足らず老侯之従
もあり三人なれども又七人ありて五人は自分の五人中一人も
毒用の人なしとなれども、刺客なるべき里見老侯を
狙撃(ネラウヒウチ)しんと願りて、のべ九三四郎出来ず復五郎ばかりの三人のみ又

南洗堂里見老侯を奪ひ取り三人南洗堂に帰の毒用の
人とせん欲ずるも南洗堂いまだ測峡の如く堀三郎孫九郎人をそれ使
者なるべ助太郎おとゝ交りあるべき他をと資けるべきとなれども出来ず
笠三人なれども南洗堂又一名早駕(メガ)使者なれば乾児(コボン)の
主人なりしかの人中人中あり憂ひを分ちて死を共にせんとなれども
なるべんやなるべく南洗堂おのれ笠三人と相資て富山を近れば蓬
八ちゝ南洗堂と資んとて但し刺客の隊に入りて南洗堂蓬八
とふ伴当なる赤毛孤獨の作者五人の中第一の任使となりて
足らざるべく蓬八おのれ毒用のものあるべく毒用のものあるべくして

五個の刺客をして刺殺せしめ新たに里見に帰順せしめ及び隆八も
その不肖なるを殺ひ去らんが為めに悪を去て善に従ひ逆を去て
順に向の證となんとの故に隆八を殺すべし故に伊賀入道
一八を先非を悔る明徴なり義俊を殺すべし結局之れなり
九二作り出す介復平南氏方の初の使臣非義の使者なり
里見に復命より更に正せしの義使に為れり其中に隆八を毒殺
その義を知れり孝子なり義俊を殺すべし則孝義両全の他策の用
意なるの如し知るべしとなんかも黙義の才なるこの程なる
べし孝子実に孝義の一失なるべし也ぞ和漢の稗史の大筆

相模堂蔵

なるもの有用の中に無用なる仏用なるもの有用の中に無用なる
文章なるもの例あり古人の例なり主富山観音堂諸の霊
験百十回の追評なる義実主富山観音堂諸の霊
異に伏姫の眞助のことを富山観世音の利益なるべしと里見
老侯の宣ひし功と佛菩薩を濃りくひとり及ち息女の徳とのみ
せられず謙遜の辞なれども又いわるゆえのみあるべし件の観音堂の
ヤヨ初伏姫の菩提の為に富山の絶頂に建立せられし故も義程も
るべし山麓の山河荒化しより長歌の諸の作りたりしの故なり大
檀那なる老侯もいまだ一下とも治めたりしと今世にもなく登

相模堂蔵

山の路ひらけ荒れ老衰必詣のごとくあるべくもとこれを六の日近月
ごとに異日を改めて又ものの数に入れ
さてかの仏ゐる所のもとの説ことの日老侯冬諸寺ひらきて
後水諸人の来詣とのもとに立宅も此月の年下て寄せ
所始仮宜とのもの且伏貴の当山の親寺に当山の親寺伏
服とのの此後西谷一體なるべく故ゆ本伊ゆの親寺の利益を
ものもの伏貴の更異ものもの看宮心つかるもの
第百十三回の所来ゆ又地蔵の名号のもと蔵化して南法六
阿法七又よのもの名のものもの名のもの名号のもと
ものもの名号のもの仏ものの階微なれども量如年天ものの切論解を
請ひのものもの名号解論ものもの彼所年年ゆ地蔵所を
つものの合明なるべく又南法六阿法七阿法七洲崎の之姫之の外孫
寺就中南法六を後乳祖風あり乳ものもの荒蔵と称も荒
蔵の洲崎の勢之又荒法といものもの南法と名つけもの南法の
借ものもの郎仮之ものの等何法七の阿法も赤假ものもの郎畑
之畑も赤荒法と仮隠ゆ縁あるのと南之阿法仏佛の省略ゆも
あるねと阿法といひ南ゆとおもものもの六ゆ名号の省ゆ七
第ものの只七所の二ゆ七所ものもの故ゆもの性偏る所あり之れも南法

こゝを首級を懸置候ハ、敵のあなどり恥辱に成ル事ハ疑ひなし、
南方阿波の武士屋へ〳〵陀佛両字を記し首級と佛場に
葬られを遂に城郭中の土となりぬる後名を遂ぶ〳〵又南方
方阿波を伐る所の村のなまて乙接といふ阿波守二男増松の作父南
阿波の縁組ありて猶又相続を為る前北又増松と兄阿波太
郎と共に里見の家臣なる人々の名誉自性なれども三知音の
評こゝの事に及れをよりて為解と仮光の用意ハ十二分なり
看官ハ五六分のこゝろの餘のく情をこゝ分別なるもまた〳〵」
第百十四回の評中に軒渠八ヶ沙雁太の首をもて南方の首級を

作るを且當日寄手の陣へ敵の雑兵一人を生物にまよう南方の
ものを本の戦死の為体を見て知れとなる上今の位をもてとなれ
翠黛の評と同意なれ穏当なるべしまたこの代首級のくれ
本輯第九十六回五十嵐の後の殿る美田駅蘭二穴栗を
作るを敵重堀内の首級をもく敵方の眞首なりと照對
なるよりも置翠黛の評ハ是ならんこの黙の為ハ照對
反對をもく見なるべし作者の心ひそかなるもまた彼ハ是の照
応此ハ後の反對こゝを一ツ見るもあるべしこの照對を
見れとなれハ心ひそかなるもあるべしこの照對を
見れとなれハ心ひそかなるもあるべしこの照對を

此に於て尓るとなれば重複に似たれども然るなれば非常の變に望の
際にはとかく出語へて言ふ事のみ多くて此の點に對ハ作者頗思ひを
潜めて作り設けたる所にて評する者も是を遂識として今ぞ輒遇
八と云ふ首級を射たるにより八犬の似たれども彼ハ船蟲の梟首と打く
兇賊男女首級と射る已を敵の首級とせしを射方戰死
首級とせんとするその術の同じくさるのことなれど彼ハ親兵衛の
寅四郎ヲんと風も此ハ眼前に使者の真の首級を得しを
見て怕れたる是を作者の思ひと潜めて作り設けし照對なる
も重複とみてハ予ハ未遂識のことなるべし

本輯ニハ妙椿の幻術怪異のことあるより評者三遍平妖傳を
見ひたるとて此ハ平妖傳に學びて平妖傳といふ只ハ作者のことを
知らざるにて憚りもなく乃今ハ絶評を折と加ふる評の如くにて
水滸傳に似たる所あれども水滸傳にこの事のあるとのことを
あやまりて論せしハ近年の演史の評論の
似たるを準據けてさる物しいてもあるべし是れも作者の
思ひけるなれ評ハ其の大事にして其の本旨正しく平妖傳と文字
まで撰述筆を改むること信と見るべからずおぼつかなき書名と
革にして信とすべし作者の意にあるべきと云ふよりれて文字

柳葉堂藏

快くの初めて評を見聚思しく、昔否とそこまれ人をしてそれを
しけれ　この間の物答評は前の例おこつそうそ
そを文まををるく別をそうまをそうく
さの評をうちうちを簡約みく精細なる事かなれ文章も
とさく簡約まく仍評をくをも漏れ〳〵ムヲれともキ知
えをぐれを且評の思ざるも唐山稗史の想評の口調ありく
をくくをも黒人めをうり亦中さの中慢の評かな出来ず
く時をを百四回より百六七回まくの評は悉反對なる他
評をいれる無をくえをくを来當をとてをを一品あるる
思意反對をえるうちをを屋実陪命の評もまくく

初より知れるを飛白体をも弓人本体中沙美の一回を自評く
知音の方、重建をうををををををををををををををををを
其評若いらの評の昔田否と答るのを知れ脳隠を盡をへくあく
を其評精細なれば答評も亦精知るべくの評疎略なれば
答評も亦陪異を引をを陪陸を為をを者いをを敵けいをを
鳴りををく者ををけををををく作るを和一をを仙盃の問答をれを酒を
聚りく醉臥しくをを高り或り雅俗前句附の系を風流物まを落語
賤裝ひを之音曲木野瓢五郎次の知れ日と費をまを
聊賜れりをを弥同志の快事を知をるを人の為るいをを

花を流世の業と侍めてかる遊戯、三昧ゴロの毛色とをもとも
思ひ〇ろ〇ろみろろ願へ。ゴロを又詩まる人あゝ秘隆八のこゝひ毛
毛用のへとれいゆゑ

一内申夏月端午　著作堂老毛識

柏葉堂蔵

柏葉堂蔵

小本二冊
近〻出板

俳諧 ひとりけいこ

貞松齋乾竜 米一馬
六〻堂人二嗣 樓川撰

俳諧といふの本昔より世に数多ありて いづれの書にても其ありて おろかなる初心よりい
手にふれとも極初心より只てハ宿かしきこと書いよせて付方と俳諧と云ものの
よろしき義で 大いに益かうるといふこと記事ありし 且ハ古人の句ともをつら
ハ解しやすくと云述たるべ 花やかなる るせを花

花のくさ 露ハ上野の浅草の

桜咲ぬる日くらゆりうちよしきひとりがハ東とれを振もとどめしかれど 乍あひけるとを
なるあつてたあらふうちなくあるの来ことあるハ上野の浅草ようと尋ねか探つてすかいなるふ
ものかとき花のちり経たんぜす そぬ花もうげをあんじら川のけて 隠者の法よ

俳諧でまうかたゆくを思ひ見へし

俳も其より所し 支て解しやうくあつまとよめりの事にて初心ならべても自他附合共もとのかう
いてきて御返をして付るもの付キーも四时の季寄も其巳の来の本よろまきうとちらいへあるまさ
増補をう

右之本何れも近々売出し書肆の店に而求て
ほりもとめられ候様奉願上候

製本所
日本橋通二町目
野田七兵衛